

## デンマークの旅

平井信義



ていた。

芝生にさえぎられて、銅像の真下に近付くことができなかつたので、半円になっている道を二三度往き来したあと、私はベンチになつている木の台に腰をおろした。そして、再びアンデルセンの姿を見上げたのであつた。

デンマークといえば、どなたもアンデルセンを思い起されるであろう。私がアンデルセンの銅像のそばに立つたのは、七月の終りの夕方であつた。公園の一隅の梢の高い木々を背にして、大きな石の台の上に、アンデルセンの姿を仰ぐことができたが、すでに夕暮の日射は木々にさえぎられ、黒い蔭を彼の像の上に落し、銅像を染めている緑青が青黒く光つ

その時の私の心には、何か彼からささやいてもらいたい気持ちがあつた。何か言ってもらいたい気持ちがあつた。しかし、彼はじつと口を閉じたままだった。長いマントの右側から出した手で、開いた本を支え、それを読むでもなく、彼の目は半ば上目がちに空を見詰めているようであつた。再び私は、彼の声に耳を傾けた。しかし、響き返って来るのは、公園の右左を行き交う町の騒音であつた。自動車の警笛があつた。電車の走る音があつた。

この騒音に打勝つて、アンデルセンから囁きをきくために、私は自分の心を集中しようとした。しかし、私の耳には一層強く町の騒音がきえてくるばかりであつた。私は、焦々した。

こうした焦々した気持ちになつたのは、これが始めてではなかつた。三月の旅で、チューリッヒ湖畔に立つた時にも感じた気持の乱れであつた。その時も湖畔に立つたのはすでに夕暮れで、西の山肌から流れて下りてくる最後の光が、湖面にひたひたと漂つていた。

湖水につき出たコンクリートの船着き場を歩み進んでいくと、柵にとまっていたか、めが、次々と飛立って、あるものは夕焼の空高く、舞い上り、あるものは湖面に下りると、大きな波紋を描いたりした。

向いの岸には、高いポプラの木が聳えていたが、やがて夕靄が立ち籠めてくると、うす墨に染まり、漸くともり始めた家々の窓の灯りと共にゆるぎ始めていた。そうした光景の後には、オーストリアへ続くアルプスの連峰が雪を抱いて続いている筈であったが、空高く



く涌き立っている霞が、その所在を示してくれるに過ぎなかった。岸边に沿っては、数百羽となく点々と、かも・あひる・おしどりなどの水鳥が、それぞれの営みで、あるいは水の中に頭を入れ、あるいは飛び立ち、あるいははたはたと飛び交っていた。私の目は飽くことなく、それらを追うことができた。

私は、遂に柵に背をもたせて、コンクリートの上に腰を下した。もうしばらくの時をここで楽しもうと思

ったのである。処が、その時、背後に鐘の音をきくと、町が騒然として来た。その騒音は恐らく前からあったものに違いないが、鐘の音と共に私を把えたのである。ごおっという漠然として騒音の中に混って自動車のエンジンを吹かす音や、バスや電車の各種の警笛や、それらが大地を踏んでいく音がきこえてくる。私にはそうした騒音が、小波を立てて、湖水一面に拡っていくかのようにさえ感じた。もう一度、

湖水の静寂を味う気持ちに立ち帰ろうとすればする程、街の騒音は涌き立ってくるようで、心なしか、水面を楽しんでいる水鳥までが、焦立ち始めたようであった。

「街の騒音が、人間の姿、子どもたちの姿を変えているように思えてならないのです」——チューリッヒ大学で数時間前に話し合った女のケースワーカーのことばが思い出される。「自動車、電車など、文明の利器の発達に伴って、人間は日常の生活の中で、静寂を楽しむ心を失っていくように思えるのです。恐らく、今の都会の子どもたちが成人になる頃には、街の騒音が生活の一部になって、もはや、静寂を楽しむ心を失ってしまうのではないのでしょうか。」中年を過ぎて、金髪に白髪をまじえたその婦人の顔には、話しが進むにつれて、次第に深い皺が刻まれるようであった。

「近代文明の所産を持つことが、本当に幸福なことなのかどうか、わからない気持がしますね。近代文明の温床はアメリカですが、アメリカ人を見ていると、何か気の毒な感じがしてくるのです。テレビ、ラジオ、映画、その他家庭の中に備えられるいろいろな器具。そうしたものを持つことが、かえってその人の心を傷付けてはいないでしょうか。ものをじっと見詰め、ものを深く味う生活がどこで養われるのでしょうか。アメリカ人の生活は、強い感覚的な刺激を求める方向をとっていますね。私もしばらくアメリカにいました。が、ラジオ・テレビのスイッチをひねれば、騒々しいジャズです。しかも、そうした騒々しさに耐え得ない人間は、取のこされたように感じてしまう国なのです。」彼女は両腕をゆるやかに拡げてみせて、軽く肩をすくめるような格好をした。

「その点、東洋人の生活の中には、静寂を愛する態度が残っている

と聞いています。私にはそれが非常に魅力的で、是非一度、東洋を訪れてみたいと思っています」——しかし、私の心には、それに合槌を打つだけの自信がなかった。

「問題の子どもたちを見てみると、——と彼女は、再びことばをつないでいった。どうにかして、彼らに静寂を味う心を与えたいと思いますね。彼らは、なかなかそれになじめないので。」

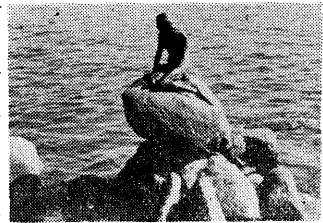
「私は、問題を持つた子どもが増加が、戦争の結果だと思っていました。日本からはるばるやって来てヨーロッパを見たとき、そして、ヨーロッパの戦争のなかつた国にも問題児が増加しているときいたとき、問題の子どもの原因は、もっともつと根深いところにあることがわかりました。」

「そうですとも。このスイスにだって、問題の子どもは年々増加しているのです。文明国といわれる国々に多い現象であり、都会に多い現象であるのですから、どうしても、現代文明の所産である器械文明に、その源を求めたいと私も思っているのです。」

「私は、ドイツでも、貴女のお国でも、日本の禅についてきかれるので驚いています。」

「実は、私もブルンナー教授から『禅』についての講演をきかされ、非常に感動したものの一人です。東洋人の家庭生活の中に、どのように禅の本質がとり入れられているか。私が東洋についてみたい、日本を訪れてみたいと思つたのも、それが動機です。」

その時、私をこれから「問題児の施設」へ案内をしようという若



い医者がいって来た。その部屋の空気が一変した。

「あなたも忙しい旅をしていられるのですね。どうか、収獲のありますように……」とひと言、いいそえると、彼女は忙しそうに事務机から書類を出して、若い医者に渡し、声高く、収容施設の子どもの状況について打合せを行った。

当時の子どもを頭に描いて書いた彼の童話を、今の子どもたちに、もう一度与えようとするだろうか。

このスイスの女の人の話は、その後、しばしば私の心に蘇ってきた。静寂と立ち向かおうと私が身構えを作っている時、何か騒音にわざわいされると、決して思い出されるのが、彼女の言つた断章であった。

アンデルセンの銅像の前に坐つたまま、私はこうしつた思いに耽つていた。私のように、こうしてアンデルセンの銅像の前に坐つて、もの思いに耽つた人たちは何千人、何万人あるか知れない。アンデルセンの銅像はそうした人たちを見ながら、どんな思いをしたことであろうか。彼は、すでに数十年の歴史のうつり変りを静かに眺めていたはずである。そうした歴史のうつり変りの中から、子どもたちのために開けてくる未来の世界をどのように予見しているであろうか。また、どのような社会を、子どもたちのために願っているであろうか。

どんどんと落ちてきた夕闇の冷たさを感じながら、私はいつまでもベンチに腰をおろしたまま、アンデルセンの像を見上げていた。